

Biêt kich

別激

知られざる南ベトナム軍コマンド部隊の実像

Cover Photo
Muneki Samejima
© WORLD PHOTO PRESS 2022
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS

ベトコンを探せ!
012 NIGHT HUNTER OPERATION Part 3

まだ語られていない
018 LST船員の記録 第12回
UNTOLD SEAMAN BLUES

030 第50回 サイゴン物語 Saigon Memories
記者たちのベトナム戦争 [27]

034 ベトナムを遠く離れて——。
私的ベトナム戦争映画 / TVムービー Part 14 文 / 小倉 徹

036 ディアアメリカ
戦場からの手紙と兵士の郵便事情

Desert Shield
042 戦場のアーティスト 戦う男たちの肖像

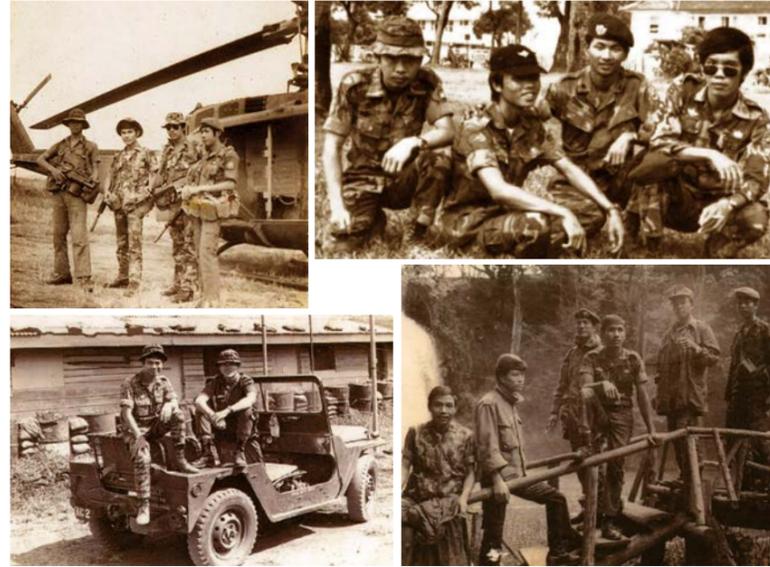
SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!
058 Ruger LCP II and LCP MAX
●by Muneki Samejima

068 Militaria Roundup!
U.S. ARMY シャツ & トラウザーズ Part 1

072 ウェスタンアームズ新製品リポート
by SHOTGUN MARCY
●ボブチャウSP ver.1.5 ビンテージ・エディション
●ベレッタM92FSセンチュリオン CBHW ver.

080 トイガンニュース TANAKA WORKS
●S&W M&P360 .357マグナム HW
●三八式騎銃Ver.2 BLACK 鬼胡桃銃床仕様

083 東京マルイ新製品リポート by Takeo Ishii
●ガスプロ グロック クロニクル



月刊 THE グリーンベレー 文/DJちゅう
089 GREEN BERET
永久保存版! ナンバリングシステム

ニッポンのちからこぶ ●写真と文 / 菊池雅之
094 PAC-3MSE 機動展開訓練

ボスゲリラ不屈のトイガン魂!
098 サバゲ・マスカラ・コントラ・マスカラ!

100 新製品情報 COMBAT mono

103 サバゲ三等兵APS部
東京本大会開催記念SP!
待ちに待ったぜAPSカップ東京本大会!

COMBAT FRONT LINE

- 082 全日本模型ホビーショー2022 東京マルイブース情報
- 107 今月中田焦点! セスラー M-43フィールドジャケット
- 108 新作映画情報「犯罪都市 THE ROUNDUP」 「ナイトライド 時間は囁う」 「ノベンバー」
- 106 レアミリタリーテクノロジー
- 109 読者PRESENT & CIC
- 111 奥付&次号予告



ミリタリースポッター

Survival Evasion Resistance and Escape (SERE) instructors train ROKAF members how to navigate, communicate and guide US Air Force (USAF) rescue units to their location.

SERE training is required for not only for all aircrew to equip them with survival techniques necessary in the event of an emergency. It is that a signal mirror to attract an incoming aircraft and guide it to his/her location.

Photo/USAF

生存、回避、抵抗、脱走 (SERE) の技術を教えるインストラクターが、大韓民国空軍の兵士たちに、自分がいる場所を米空軍のレスキュー部隊に伝え、ナビゲートする方法を教えている。SERE訓練が必要なのは航空兵だけに限らず、緊急時に必要となるサバイバル技術である。その時にシグナルミラーは、自分の居場所を航空機に伝え知らせる道具になる。

Biêt Kich

別激

第1回

知られざる南ベトナム軍 コマンド部隊の実像(1)

SPECIAL INTERVIEW WITH
FORMER SOUTH VIETNAMESE
COMMANDO Lt. HOA PHAM (PART 1)

特殊部隊には訓練や医療活動を行なう“表の顔”——多くの場合軍事顧問と呼ばれる——と越境作戦などの極秘任務に従事する“裏の顔”、ここでいうコマンド部隊の二つの顔があり、存在そのものが秘密となっているコマンド部隊ではどんなに大きな働きを見せても表だった表彰は受けられず、作戦で命を落としても見向きもされない。ベトナム戦争で“Biêt Kich (別激)”と呼ばれた南ベトナム軍コマンド部隊の一人、ホア少尉が未だ謎に包まれた当時のゲリラ戦やサバイバルについて振り返る。

Text/Kentaro Suzuki Interview/Hiroko Ito Photos/Hoa Pham

ホア少尉ことファム ホア (Pham Hoa) さんは1953年生まれ、アメリカ軍の大部分が撤退した1972年に南ベトナム陸軍に入隊した。士官学校を卒業して少尉となった彼はアメリカ軍のMACV-SOGとともに数々の極秘任務を行っていた南ベトナム統合参謀本部直属の特殊作戦機関NKT (Nha Ky Thuat、アメリカ軍による英訳ではSTD-Strategic Technical Directorate、日本語に直訳すると戦略技術総局となる) 指揮下のコマンド部隊に志願し、志願者124人のうち3人しか合格しなかったという苛酷な試験に合格、NKTコマンド部隊“黒龍 (Hac Long)”の一員となる。ホア少尉がコマンド隊員として活動を始めたのは1972年5月で、アメリカ陸軍第5特殊部隊グループはすでに撤退しており、彼らが深く関わっていたMACV-SOGは名称をSTDAT-158 (Strategic Technical Directorate Advisory Team 158) と変更するとともに規模を縮小、南ベトナム陸軍特殊部隊LLDB (Luc Luong Dac Biet-力量特別) は解散していた。NKTのコマンド部隊にはホア少尉が所属した“黒龍”のほか“雷虎 (Loi Ho)”があり、少尉によると“雷虎”と“黒龍”はLLDB、空挺レンジャーなど数ある南ベトナム軍エリート部隊の中でも別格の存在だったという。ホア少尉はアメリカ軍が撤退を完了した後も南ベトナムへ侵入する北ベトナム軍と彼らを支援する解放戦線の動向を探るためラオスやカンボジア国境で偵察活動に従事し、将校であった彼は何日間も敵地で過ごす偵察チームのチームリーダーとして危険な目に遭いながらも優れたリーダーシップを発揮した。1975年4月30日にサイゴンが陥落し、南ベトナム軍兵士が「反逆者」として追及される中で、コマンド部隊将校というこれ以上ないほど危険な立場であったホア少尉は幸運にもアメリカに逃れることに成功し、現在ではアメリカ在住の元南ベトナム軍人コミュニティーにおける顔役ともいべき存在になっている。

UH-1ヘリに足をかけながら鋭い視線をこちらに向けたホア少尉。同時に極力近づけた武器と戦闘服、そして装備品は少尉の私物で、黒と茶色のスプレーで迷彩が施されたジャングルファティーグ、頭に巻いたオレンジグリーンの三角巾、予備の水、食料、そして弾薬で膨れ上がった非制式品のリュックサックは戦争が終結してから50年近く経った今も少尉の身体の一部のように馴染んでいる。高い戦闘技能と常人離れした自制心を合わせたコマンド隊員はベトナム戦争における影の主役と言っても過言ではなく、当時のコマンド隊員に出会える機会はめったにない。



(上) ホア少尉が所属していた南ベトナム軍コマンド部隊“黒龍”の看板。龍とパラシュートを組み合わせたデザインは部隊パッチにも取り入れられている。(下) 戦争再現イベントでM60機関銃を構えるホア少尉。仲間が当時のコマンド隊員に愛用されたCAR-15ではなく、M4カービンを持っているのはご愛嬌。ホア少尉はこのようなイベントに参加するだけでなく、当時使っていた武器や装備を中心に軍装品の収集も行なっているそうだ。



士官候補生時代のホアさん。制帽は下士官学校のものだが、南ベトナム軍では戦局が激しくなった1968年以降下士官学校でも士官教育課程が実施されており、ホアさんもこの課程を修了したと思われる。



ベトコンを探せ!

NIGHT HUNTER OPERATION

Part 3

「ファイヤーフライ」の光を浴びた ベトコンは、魂を闇夜に 吸い取られてしまう

訳と構成／コンバットマガジン編集部 写真／米陸軍、NARA Illustration/M. Kelly
Photo/US Army, NARA Source : Firefly, 'U. S. Army Aviation Digest,' November 1967

ベトナム戦争初期には、地上戦の陣地合戦は、シーソー状態がしばらく続いた。日中は南の政府軍勢力が大部分を支配下においていたはずなのに、夜になるとベトコンが巻き返しに出る。夜の闇に紛れて、彼らは部隊を好きに動かして、意のままに再補給を受けることができた。そこ

で当時は「ライトニングバグ」と呼ばれていた(今は「ファイヤーフライ」である)ものが投入され、夜間に物資や武器の再補給を受けるという、ベトコンが握っていた大きなアドバンテージを削ぐことができた。この新しく登場したクラスター型のサーチライトに付けられた「ファイヤー

フライ」の名は、点滅するサーチライトが蛍のようだったことによる。ベトコンのサンバンに向けて、ピンポイントで「ファイヤーフライ」のまばゆい光線を照射すると、直後から、「30隻のサンバンを発見、2船団を駆逐」、「68隻のサンバンを沈没させた」、「30から40フィート級の大型

サンバン船団を撃破」と、次々と報告が入ってきた。あるレポートでは、こんな報告もされていた。65隻を超える敵のサンバンを沈没させた。その規模は大隊で作戦を展開できるほどの補給物資を満載していた。また別の報告では、敵のサンバン

を38隻沈没させたが、そのなかに弾薬やいろいろな爆発物を運んでいた船が混じっていたらしく、二次爆発が起きた。翌日、明るくなってから川には2マイルにわたって木片や油やちぎれた布が浮かんでおり、川岸にはねじ切れたモーターの部品が打ち上げられていた。このようにして

補給物資を失ったことは、ベトコンにとり、二重の意味で痛手だった。武器装備と補給物資は、数百マイルも離れた遠い場所から運んできたものだった。それを受け取る寸前で、すべて失ってしまった。ベトコンを支援してきたいろいろな人たちの努力は、敵にとって、最高に深刻で大き

な打撃になる時と場所を選んで、すべて無に帰してしまった。「ファイヤーフライ」の開発は、1965年5月に始まった。ベトナムにいる米陸軍のコンセプトチームが、国際的なエンジニアリング会社が、夜間作戦用として、ライトをクラスター状に束ねたものをヘリコプター

に搭載できるように開発中だという知らせを受けた。そのライトは、ベトナムの現地で入手可能な資材を使って組み立て、第197航空中隊に引き渡された。同部隊は、当時ベトナムに展開している唯一の武装ヘリ中隊だった。(当シリーズの Part 2 を参照、コンバットマガジン2022年10月

北ベトナムとの軍事境界線も近いトゥアンアン。LSTが着岸した場所近く、米軍の車両が行き交う道を、漁師から仕入れてきたばかりの魚を天秤棒にぶら下げ、市場へ向かう裸足のオバサン。「運しい」というのは、こういう事かもしれない。

UNTOLD SEAMAN BLUES

写真と語り／木村 守 (元LST乗組員)
文／吉野文敏 構成／編集部

【第12回】

まだ語られていない
LST船員の記録

アメリカがベトナム戦争に本格参戦して3年が過ぎた1968年、一向に戦果が挙がらず、増兵と戦費拡大ばかりが進む状況にアメリカ国内では反戦デモが頻発し、厭戦気運が高まっていた。アメリカが北爆を全面停止したこの年の10月、木村さんは3隻目となった「LST546」での長い長い5回目の航海の真っ最中だった。

映画『ディア・アメリカ』について

しかし、アメリカ映画のふところの深さにはびっくりさせられてしまうね。ここに紹介する『ディア・アメリカ 戦場からの手紙』が加わると、ベトナム戦争に関してはもう眺める角度がないぐらいに各テーマの映画が勢ぞろいしたといえる。

ベトナム戦争を哲学的(?)に見た『地獄の黙示録』。シリアスドラマで大反響を巻き起こした『ディア・ハンター』『帰郷』。徹底したリアル&ドキュメンタリズムタッチの『プラトーン』と『ハンバーガー・ヒル』。戦争と人間の狂気をだぶらせた『フルメタル・ジャケット』。笑いを逆説的に用いた『グッドモーニング・ベトナム』……。いやあ、アメリカ映画界って本当に大したものだね。

もし、今、列記してきた映画を1本でも観て何か感じるところがあったのなら『ディア・アメリカ 戦場からの手紙』はゼッタイに見落としてはならない映画として、きみの前に立ちはだかるに違いない。

映画の元は、本からであった。1985年、戦場の兵士達書いた、家族や友達への手紙をまとめた1冊の本が発表された。それが『Dear America』(バーナード・エデルマン編) /邦訳有り)であったのだ。ベトナム戦争に従軍した兵士達の208通の正直な声が収められている。

映画は原作から選り出した60通の手紙を、トンキン湾事件から最初の捕虜機関まで、年代順に並べて構成している。映像の方は、兵士自身が撮った8mmフィルム、NBCライブラリーや国防省の未公開ニュースフィルムで構成されている。またナレーターには総勢33名の大スター(ロバート・デ・ニーロ、マーチン・シーン、ウィレム・デフォー他)がノーギャラであたっている。

ぼくたちは日本人であるから、遠い異国の戦争を理解できないと思うかもしれない。しかし『ディア・アメリカ 戦場からの手紙』を観ている時、そんな他人事には決してみえてこない。どうしてだろう。それは国家レ



ベトナム戦争に従軍した兵士の208通の手紙が収められた『Dear America』の原書。

ベルの戦争ではなく、戦場の極限状況と、死への恐怖におののきながら、怒り、悲しみ、喜び、といった感情をあらわにする一個人の人間像がそこにあるからだ。静かな語り口の画面は、かえって観る者の胸を打たずにはおかない訴えを秘めているのだ。

映画を観ている者をもっともつらくするのは、息づかいが聞こえてきそうなほどの手紙の内容にもかかわらず、それを書いた本人がもうこの世にはいないという冷徹な事実にも思いがいく時だろう。しかし、そんな感傷も観客の想像力まかせというぐらい、映画は静かでおしきせなところがない。とかくテーマを絶叫する日本映画も学んでほしいぐらいの余裕の見せようである。「ディア・アメリカ」は家族とともに三度の食事をとるのがどれだけ幸せなことをわからせてくれる映画でもある。[配給・東宝東和/1時間26分/現在公開中]

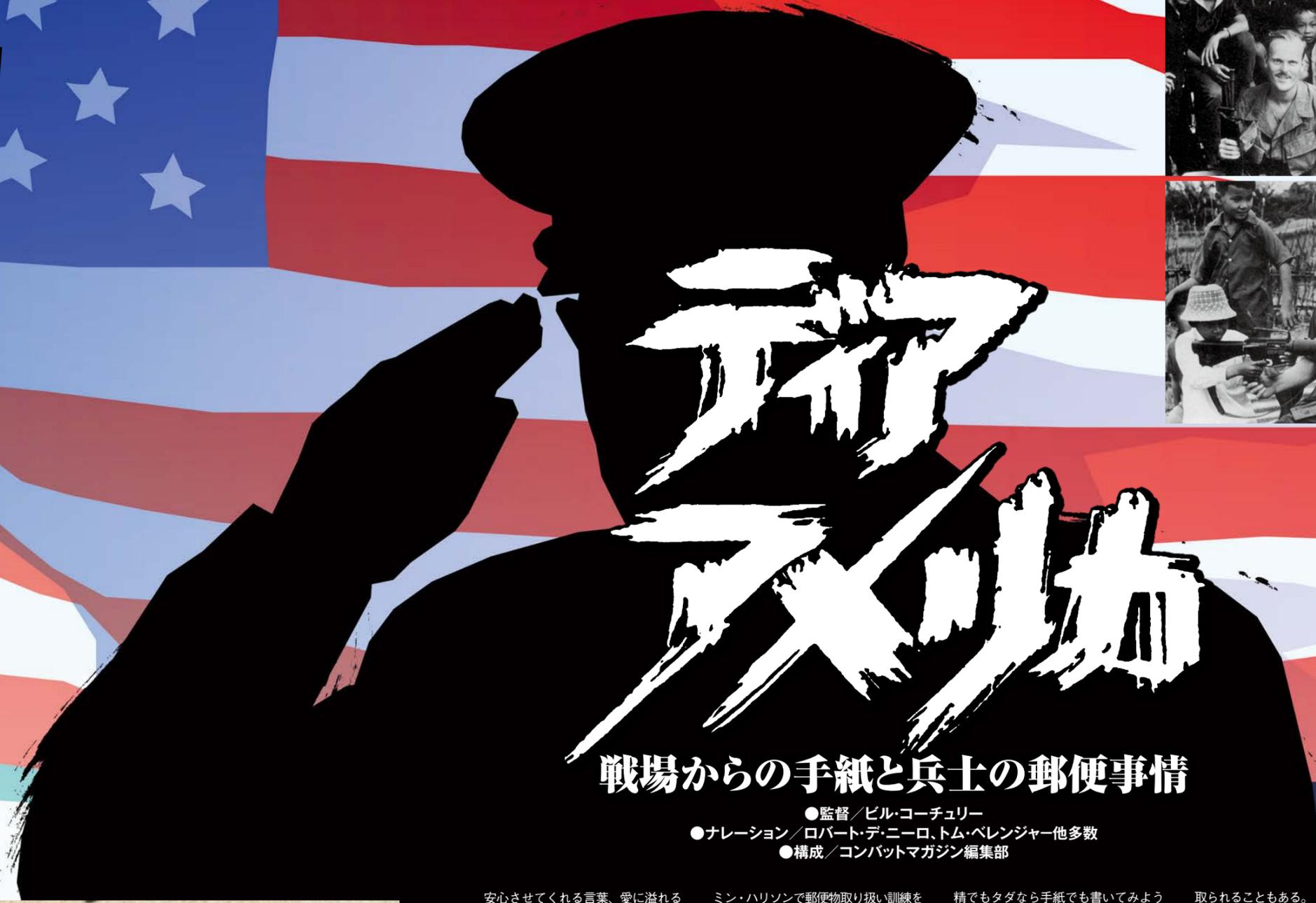
兵士たちの手紙で語られるベトナム戦争の真実が遠くアメリカの地で読む者の胸を熱くする。

Later that same day I received a phone call from a mother in Billings, Montana. She had lost her daughter, her only child, a year ago. She needed someone to talk to for no one would let her talk about the tragedy. She said she had seen me on [television] on New Year's Eve, after the Christmas letter I wrote to you and left at this memorial had drawn newspaper and television attention. She said she had been thinking about me all day, and just had to talk to me. She talked to me of her pain, and seemingly needed me to help her with it. I cried with this heartbroken mother, and after I hung up the phone, I laid my head down and cried as hard for her. Here was a mother calling me for help with her pain over the loss of her child, a grown daughter. And as I sobbed I thought, how can I help her with her pain when I have never completely been able to cope with my own?

They tell me the letters I write to you and leave here at this memorial are waking others up to the fact that there is still much pain left, after all these years, from the Vietnam War.

But this I know. I would rather to have had you for 21 years, and all the pain that goes with losing you, than never to have had you at all.

Mom



戦場からの手紙と兵士の郵便事情

●監督/ビル・コーチュリー

●ナレーション/ロバート・デ・ニーロ、トム・ベレンジャー他多数

●構成/コンバットマガジン編集部

安心させてくれる言葉、愛に溢れるメッセージ、近況報告、思い出……。往復書簡は戦場の兵士と平和な日常世界を結ぶライフラインと言える。第25師団APO (Army Post Office=陸軍郵便局) はこのライフラインを支えるシステムであり、1日に35000通の手紙を取り扱っている。

郵便物を最初に捌くのはクー・チ、タイ・ニン、および小規模の前哨地のAPOに配置されている将校2名と下士官46名の仕事だ。多くはフォート・ベンジャ

ミン・ハリソンで郵便物取り扱い訓練を受けた。大隊や中隊にも郵便局員がおり、兵士たちに手紙や贈り物、おいしいものが詰まった小包を届ける責任を負っている。手紙や小包を受け取った兵士たちは、故郷の誰かがわざわざ送ってくれたのだということを知って元気づけられる。その安心感も一緒に届けている。

無料

毎日第25師団から数トンにおよぶ郵便物が外界に送り出される。軍事郵便物は切手代がかからず、どんなに筆不

精でもタダなら手紙でも書いてみようか、という気になるものだ。息子はカードの1枚もよこさないだろうと思ってたのに、長文の手紙がどんどん送られてくるという家族もいる。政府は自由世界のどこへでも、住所さえ正確に記されていれば、無料で送り届けてくれる。

手紙はサイズの規定はなく、雑誌の切り抜きや写真といった同封物も認められている。ただし、同封物が多過ぎると判断された手紙は返送されて郵送料が

取られることもある。

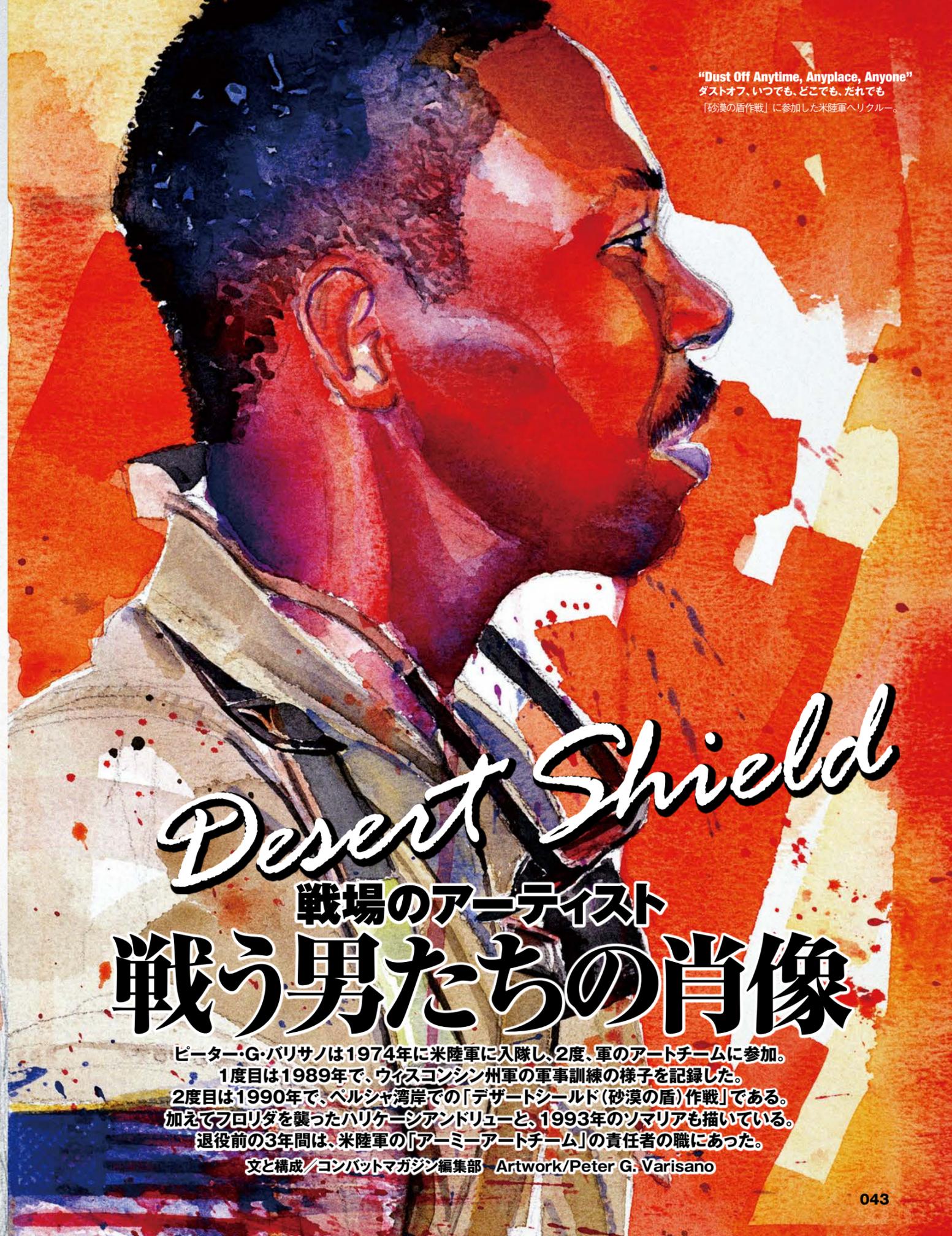
無料の軍事郵便物はアメリカ到着後はたとえAir Mailと書かれていても6セントの普通郵便(海陸送郵便)として取り扱われる。ただし、アメリカでは大部分の普通郵便はいずれにしても空輸されるので、6、7日で宛先に届くのが普通だ。

合衆国向けの手紙に加えて、APOは異国情緒あふれる東洋の珍品や安いPX価格で購入された日用品が入った何千個もの小包も取り扱う。包装に不備があり





Free Kuwait, 1st Cavalry Div.
クウェート解放 第1騎兵師団
米陸軍第1騎兵師団は、イラク
によって併合されたクウェート
を解放する作戦に従事した。



"Dust Off Anytime, Anyplace, Anyone"
ダストオフ、いつでも、どこでも、だれでも
「砂漠の盾作戦」に参加した米陸軍ヘリクルー。

Desert Shield

戦場のアーティスト

戦う男たちの肖像

ピーター・G・バリサノは1974年に米陸軍に入隊し、2度、軍のアートチームに参加。
1度目は1989年で、ウイスコンシン州軍の軍事訓練の様子を記録した。
2度目は1990年で、ベルジャ湾岸での「デザートシールド(砂漠の盾)作戦」である。
加えてフロリダを襲ったハリケーンアンドリューと、1993年のソマリアも描いている。
退役前の3年間は、米陸軍の「アーミーアートチーム」の責任者の職にあった。

文と構成/コンバットマガジン編集部 Artwork/Peter G. Varisano



Ruger LCP II and LCP MAX

昨年、東京マルイから発表され人気を確立した「コンパクト・キャリー・ガスガン」シリーズ。アメリカでもこの手のコンパクト・キャリー・サイズのピストルの需要は高く、とりわけLCPシリーズはよく売れており、今年の3月にはRuger LCP IIをモチーフにした新製品が登場。こちらも人気を集めている。今回は日本でのトイガン発売に合わせ、LCP IIをメインに、年末に発表された新製品Ruger LCP MAXの2挺をご紹介します。

●Special Thanks to Kerry Pearson, Nail Saito, Iain Harrison and Eugene Oh.



スターム・ルガーとルガーP08

日本でルガーというと、ドイツのルガーP08を思い浮かべる人が多いかもしれない。トイガンでも発売され、アニメや小説など数多くの作品に登場したことで日本でも知名度が高い。だが、アメリカで「ルガー」といえば、スターム・ルガー社の製品を指す。英語で、ルガーP08のルガーは「Luger」であり、スターム・ルガーのルガーは「Ruger」となる。日本語だと表記や発音が同じでも英語では、まったく違う。「Ready」と「Lady」

の違いに差がある訳だが、日本語を母語とし、英語を後から学習した人にとっては、両者の発音を使い分けるのは簡単ではない。アメリカに住んで10年以上経つ僕にとっても「L」と「R」の発音を完璧に使い分けるのは、いまだに苦労している。

日本語の「ラリルレロ」の発音は、アメリカ人の友達に聞くと、単語によって「R」にも「L」にも聞こえるらしく、日本人には余り理解できない所かもしれない。いずれにしても、ガンショップに行って「ルガー」と日本語と同じように発声すると

「Luger」寄りに聞こえるらしい。そして、P08が出てくるなら面白いが、アンティークに近いP08は、現行製品ではないし、存在自体を知っている人が少ない為「こいつは一体どの銃が見たいんだ？」と店員に思われてしまうかもしれない……。「Rug

er」と言いたい場合は、舌の巻きを意識して発音することが重要だ。

スターム・ルガー社のポピュラー・モデル

ルガー社の銃として多くの人が思い浮かべるモデルは、初心者向けの

.22口径の銃として有名なマーク・シリーズだ。競技にも使える精度があり、単なる初心者向けの.22口径で片付ける事の出来ない優れたモデルだ。ほかにも大口徑リボルバーとして、存在感のあるレッド・ホークやブラック・ホーク等を知っている人は多

いはずだ。このようにルガー社のラインナップは広く、また製品のクオリティも高い。ロストワックスやキャスト等の鑄造工法をうまく導入して、各製品の価格が安く抑えられている点もルガー社が高評価されるポイントだ。正直、僕が日本に居た頃

に受けたイメージは“安いクオリティも低い製品を展開するメーカー”だったが、アメリカに来てからそれは間違いだったことを知った。ルガー社の製品はガンショップでもほかの大手メーカーと並んで在庫されているのだ。

そんなルガー社の製品の中でも成功作として知られるのがLCPだ。初期モデルが登場したのは2008年頃であり、ちょうどその頃からCCW、つまり銃を護身用として家に置いておくだけでなく、日常携帯することが一般の間で急速に広まっていった。



Militaria Roundup!

Part 1

U.S. ARMY シャツ&トラウザーズ

各国軍のユニフォーム一式を揃える場合、これだけは外せないマストアイテムが存在し、その代表格がユニフォームの基本となるシャツとトラウザーズ(ズボン)だ。今回の『Militaria Roundup!』は現在でもある程度オリジナルの入手が可能で、複製品も販売されているアメリカ陸軍のシャツ&トラウザーズを紹介していこう。

解説/菊月俊之 写真/青木健格 撮影協力/中田商店 ☎03-3823-8577 <https://www.nakatashoten.com/>

アメリカ陸軍のシャツ

アメリカ陸軍のシャツは19世紀からスリッポン(頭から被るデザイン)式が一般的だった。前合わせが裾まで開いたコート・スタイルのシャツは1924年に将校用が採用されたが、下士官用シャツがコート・スタイルになるのは1933年となった。このシャツは“OD.コート・スタイル・フランネル・シャツ(Shirts, Flannel, od, Coat style/33年10月4日制定スペック8-26C)”と呼ばれ、民間のドレス・シャツに似たデザインとなっている。

1940年には襟と前立てのデザインを変更し、カジュアル・タイプのシャツが新たに採用され、スペックはウール製とコットン製で共通のもの(1941年10月8日制定スペック96A)が制定されている。スペックが共通なのは、メーカーが設備や製造工程の変更なしに両者の製造を可能としたもので、戦時の大量生産に配慮したものであった。

そして第2次大戦突入後は毒ガス防護用の“スペシャル”版と“プロテクティブ”版が採用され、従来のシャツに代わって支給されるようになっていく。大戦終結後はデザインが戦前のドレス・タイプに戻り、両肩にショルダー・ループを追加したものが採用されている。

1941年に撮影されたアメリカ陸軍新日制服(サービス・コート)の比較写真。1912年に採用され、21年に変更された制服は立て襟だったが、26年には開襟に変更された。これによりシャツは表から見えるユニフォームとなった。ちなみに夏期にはコットン製シャツの上からコットン製の制服を着用したが、38年には制服を着用せず、コットン・カーキ・シャツをアウターとして着用するように変更されている。(Photo : U.S. Army)



WW2ウール・シャツ内訳

1944年(補給部カタログ QM 5-54)
Shirt, Flannel, od, Coat Style
Shirt, Flannel, od, Coat Style, Protective
Shirt, Flannel, od, Coat Style, Special
1946年(補給部カタログ QM 3-1)
Shirt, Flannel, od, Coat Style
Shirt, Flannel, od, Coat Style, Special

1916年型ウール・シャツ

コート・スタイルのシャツが採用されるまで、アメリカ陸軍のシャツは頭から被るスリッポン式のデザインだった。写真は1916年型で、季節(気候)に対応してオリーブ・ドラブのウール製とカーキのコットン製の2種類が作られた。1924年には将校用として正面が完全に前開きでショルダー・ループを追加したものが採用されたが、下士官用シャツが完全に前開きになるのは34年から。



1912年型ウール・ブリーチズ

1902年にアメリカ陸軍はユニフォームを一新し、来のストレートなトラウザーズに代わりブリーチズ(乗馬ズボン)を導入した。ブリーチズはヒップから腿の部分をゆったりさせた裁断のため動きやすく、汗をかくても膝が引っかかったり、布地が張り付かない利点がある。写真は第1次大戦中に着用された下士官用の1912年型ブリーチズ。



アメリカ陸軍のトラウザーズ

1902年、アメリカ陸軍は従来のユニフォームを一新し、それまでのトラウザーズは“ブリーチズ”と呼ばれる乗馬ズボンに変更。これを全兵科共通で1930年代まで使用した。陸軍がトラウザーズを導入するのは1930年で、一般大学の予備役将校訓練課程(ROCT/Reserve Officers Training Corps)を受講する学生に支給。また34年には失業対策のために組織された市民保全隊(CCC/Civilian Conservation Corps)のメンバーにトラウザーズを支給している(陸軍はCCCへのユニフォーム供給を担当した)。

そして1937年には色番号オリーブ・ドラブNo.32(ライト・シェード)で18オンス(1ヤード平方の布地重量)のウール・サージを使用したウール・トラウザーズが採用(37年11月9日制定スペック8-83B)され、陸軍航空軍団(U.S.A.A.C.)の将兵に対し、勤務時のトラウザーズ着用が認められた。そしてほかの陸軍兵科でも順次トラウザーズの着用が認められ、40年までにブリーチズは乗馬部隊のユニフォームとなった。

ウール・トラウザーズはシャツと共に通常軍装と野戦軍装の兼用だったが、トラウザーズは大戦中により野戦向きに裁断や色を変更してウール・フィールド・トラウザーズ(1944年11月21日制定スペック353B)へ発展。ライト・シェードのウール・トラウザーズは製造が中止され、限定採用アイテムに区分されている。

WW2ウール・トラウザーズ内訳

1944年(補給部カタログ QM 5-54)
Trousers, wool, Serge, od, Light-Shade, Protective
Trousers, wool, Serge, Special, od, Light-Shade Regular
Trousers, wool, Serge, od, 20oz
Trousers, wool, Elastic, od, Light-Shade, 18oz Aviation Cadet
1946年(補給部カタログ QM 3-1)
Trousers, wool, Serge, od, Light-Shade
Trousers, wool, Serge, Special, od, Light-Shade
Trousers, Field, wool, Serge, 18oz, Special
Trousers, Field, wool, od, 22oz
Trousers, Field, wool, Serge, od, 33, 18oz, Special

UNLISTED MEN'S SHIRTS

REGULATION—NEATLY TAILORED—SANFORIZED GUARANTEED NOT TO SHRINK

No. 401—Genuine Poplin Shirts.	\$2.50
No. 402—Genuine Chino Khaki Shirts.	2.50
No. 403—O. D. Broadcloth Shirts.	1.50
No. 404—G. I. Light shade Oxford Cloth Shirts.	1.50

All Wool Shirts—Refer to Officer's shirt price listing—without Shoulder Straps



WW2 下士官兵用ウール・シャツ SHIRTS, FLANNEL, od, COAT STYLE

第2次大戦中に使用されたウール・シャツは1934年採用のものが基本で、従来の頭から被るブルオーバー式から、コート・スタイル(前が裾まで開いていて、ボタン留めするシャツのこと)に変更されたのが特徴。前合わせは7個のボタンで閉じ、両胸に大型のPATCHポケットが付けられた。シャツには将校用と下士官兵用の別があり、将校用のシャツには両肩にショルダー・ループが付くのが外見上の違い。

初期のウール・シャツはワイシャツ等に見られる台襟付きのシャツ・カラーだったが、1941年には開襟でも着用できるコンバーチブル・カラーに変更された。ウール・シャツの材質は陸軍規定600-35で①10.5オンス(1ヤード平方の布地重量)のフランネル、②ウーステッド、③ギャバジンの3種類とされているが、下士官兵用のウール・シャツはフランネル製のみ。下士官兵用ウール・シャツの支給定数は2枚だった。



初期型ウール・シャツ(Spec 8-26C)

下士官用ウール(フランネル)・シャツの初期モデルはシャツの前あきが「表前立て(ブラケット・フロント)」なのが特徴で、襟も台襟付きのシャツ・カラーとなっている。1933年10月4日付のスペック8-26Cに基づいて作られたもので、ストック・ナンバーは.55-S-5487-1~55-S-5517-7)。41年10月8日付のNo.26Aにより、ウール・シャツは襟がコンバーチブル・カラーで、前合わせが「表前立て」から「裏前立て(フレンチ・フロント)」に変更されている。



ウール・シャツとトラウザーズの上から野戦装備を着装した陸軍軍曹。写真は陸軍ユニフォームの記録用として1940年8月に撮影されたもの。当時の野戦軍装は通常軍装の上に野戦装備を着装するスタイルで、制服はフィールド・ジャケットに変更されたが、シャツとトラウザーズは通常軍装と野戦軍装の兼用だった。(Photo : U.S. Army)



シャツ・カラー

最初期のウール・シャツは「台襟」が付いているのが特徴。台襟は襟を高く立たせるための土台で、ネクタイを締めた際の見栄えを良くする役割を持つ。「襟足」や「襟腰」とも呼ばれ、主にワイシャツに使用されているもの。1941年のスペック変更により、シャツの襟は台襟のないコンバーチブル・カラーに変更された。

補給部ラベル

シャツの裾右側に付けられた陸軍補給部のラベル。ここで紹介の最初期タイプのシャツはラベルが欠損しているため、写真は1941年10月8日制定のスペック26Aに基づいて1942年に製造されたシャツのものを掲載した。ラベルにアイテム名が表示されていないが、これは大戦初期のシャツやトラウザーズのラベルに見られる特徴。サイズは首まわりと袖丈の二元表示で、最少13.5×32in、最大20×34inの幅で計30サイズが設定されていた。



袖口

ウール・シャツの袖口にはカフスが付き、シングル・ボタンで閉じられる。袖の開き部分には「剣ボロ」と呼ばれる表前立てのような布が縫い付けられた。ボタンは正面合わせとポケットに使われているものと共通で、直径13mm。色は数種類のバリエーションが存在しており、大戦後期の生産分の方が色が濃くなっている。



胸ポケット

シャツの両胸にはボタンで閉じるフラップ付きのPATCH(貼り付け)・ポケットが付く。ポケット下部両端が斜めに裁断されているのが特徴だが、これは第1次大戦中に製造工程の簡素化のために導入されたデザインのため、それ以前は丸みの付いた裁断だった。ポケットのサイズはシャツのサイズに応じて少しずつ異なっている。

BOB CHOW SPECIAL Ver.1.5 VINTAGE EDITION

WESTERN
ARMS

戦うための機能を突き詰めた黒く獰猛な野獣
M1911ボブチャウ・スペシャル!

●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
ウエスタン アームズ 03-3407-5922
http://www.wa-gunnet.co.jp



全体のエッジを落としたブッシングにボブチャウ・スペシャルを示す刻印が刻まれている。

ロンドン・オリンピック (1948年) の22ラピッドファイア銅メダリスト、33種類の.45ワルドレコードを持つという世界トップクラスのシューター、ボブ・チャウ (1907~2003年) が創り出した究極のファイティング.45「ボブチャウ・スペシャル」。すべての角を削り落としたスナッグフリー・スタイルは、現在もキンパーのメルト・フィニッシュなどに引き継がれている。

正確なデザインでモデルアップされた独特のワイド・グリップ・セフティ。ピーパー・テールがなかった1970年代後半に、ボブが溶接で自作したオリジナル・パーツを再現している。今回のボブチャウ・スペシャルには木目調の樹脂製グリップ・パネルが付属。ウエイト内蔵で、重量増加に大きく貢献している。

1970年代に、M1911の使用を前提にした近代的で戦闘的なシューティング・テクニックが急速に発展した。そのテクニックを取り入れて基本的なシューティング・スタイルを確立したのがIPSC (インターナショナル・プラクティカル・シューティング・コンフェデレーション)だ。1976年に設立され、現在では世界中に支部を置く実戦射撃団体に発展。日本にもIPSCのレギュレーションに沿ったシューティング・マッチを開催しているグループがいくつかある。近代的なシューティング・テクニックが広く普及し、その技量を競うシューティング・マッチが数多く開催されるようになると、マッチ・ウエポンの中心となるM1911には、より優れた精度とスピード・シュートに追随する高度な機能が求められるようになっていく。それを支えていたのが日本でも著名なガンズミス達だ。中でも、シャープな外観とスタイリッシュなカスタム・アップを得意としたのがJ.W.ホーグ。操作性の

高いカスタム・パーツ、スマートなデザインなどで、近代的なカスタム・ガバメントの歴史を切り拓いた。ホーグを始めとするガンズミスが、視覚的にも優れた豪華なカスタムを製作する中、独自の構想でハンドガン・コンバットに徹したカスタム.45を作っていたのが、中国系アメリカ人のガンズミス、フランク・ロバート・チャウ=ボブ・チャウだった。洗練されたシャープなシルエットを目指すホーグに対して、すべてのエッジを丸め、スナッグフリーを極めたのがボブ・チャウ。対極に位置するといってもいいこのふたりのデザインは、1970年代の終わりから'80年代の半ばにかけて、日本のガン・フリークにも大きな影響を与えた。しかも、40年近く経った現在でも、往年のM1911ファンの多くがその熱狂の中にいる。ペーパーやスチール製のターゲットではなく、撃ち返してくるターゲットに対していかに有利に戦うか——。勝つための機能を突き詰めたボブチャウ・スペシャルは、

※撮影用のモデルはプロトタイプのため、量産品とは仕様異なる場合があります。



TOKYO
MARUI



GAS BLOW BACK GLOCK -Chronicle- ガスブロ グロック クロニクル

Photo & Text by Takeo Ishii
株式会社 東京マルイ ☎03-3605-1113 www.tokyo-marui.co.jp

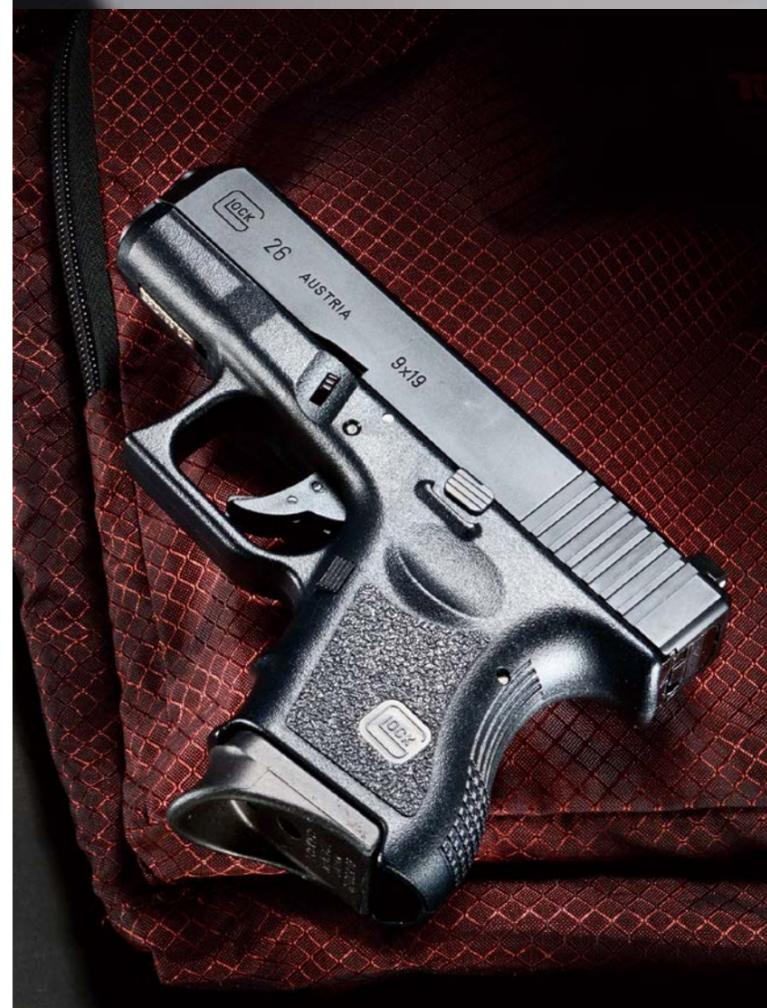
**シューター&サバゲーマーのマストアイテム、
マルイ/ガスブロ・グロック22年の歩みを振り返る!**

グロックは「現場仕事に強い」拳銃だ。雑に扱っても構わないような感じがするのかロクに手入れもされず汚れたままで雑に扱われがち。自己主張の薄い目立たぬデザインなので普段は気につけられもしない。

しかし、イザ! という時には過不足なく役に立ち、じつに頼もしい。虚飾のない質実剛健さはまさしく「究極のプロフェッショナル・ツール」の具現化だ。

東京マルイのガスブローバック・グロック・シリーズもまさしくそんなアイテム群だ。好むと好まざるとに関わらず「イマドキのエアソフト撃ち」ならソコソコうまく扱えないと恥ずかしい存在といえる。

登場から22年を経て現在もなおフィールドやレンジのスタンダードとして君臨する東京マルイ/ガスブロ・グロックの魅力を振り返ってみよう。





月刊



THE グリーンベレー GREEN BERET

vol.47

THE A TEAM NUMBERING SYSTEM ナンバリングシステム

文/DJちゅう 写真/U.S.ARMY

Special Forces Group (以下SFG) を構成する、最小の12名チームをODA-XXXX (※Xには数字が入る) と、この連載で何度も紹介してきましたね。今回はそのODAに割り振られたナンバリングシステムをご紹介します。規則性のあるナンバールールを覚えておけば「あのチームはどここの所属なんだな」というのが分かるようになるので是非とも押さえておきましょう。ミリコスをする上でも、売られているチームパッチに描かれた番号を読み解くにも活用できますし、次のページ以降に掲載するチャートは資料として役に立つのではないかなと。

さて、基本的なことですが、ちよろ

とおさらいを。「Operation Detachment-Alpha (アルファ作戦分遣隊)」の頭文字をとって「ODA」または「Aチーム」と呼ばれる12名構成のチームは、作戦時に最前線で活動する実働部隊。そのODAが複数集まり、中隊規模の「ODB (Operation Detachment-Bravo)」を形成。さらにODBが複数集まり、大隊規模の「ODC (Operation Detachment-Charlie)」を形成します。ODCが複数集まり、ようやくグループ規模 (例えば10th SFG) となるわけです。文章だけだとちょっと分かりづらいですね (笑)。

各ODBやODCには司令部的ポジションがあるので、ODAで培った経験を基にキャリアアップしてそちらに進む

人も多いです。ちなみに僕らのようにグリーンベレーのミリコスする人が「ODA装備です」というのは同じグリーンベレー (特殊部隊有資格者) でも本部と現場と様々ですので、区別した場合の呼称となるわけです。ま、個人的には呼び方はどちらでも良いとは思いますが。で、このように複数のODAが集まってグループを形成しているわけですが、ややこしいのが1952年の創設から2006年まで各グループのナンバリングルールが独自に行なわれていたこと。ルールが違うので現場や退役軍人の中で度々混乱が起きたりして長年悩まされていたとか。ようやく長年の試行錯誤の結果、2007年にUSASOCが標準化したシン

ブルな4桁のナンバリングシステムをSFG全体で採用するに至ったようですよかったですね。そもそも何故ルールが異なったのか? どうやらその頃のSFGでは各グループが担当する地域・任務に合わせて独自のSOP (標準任務規定) を開発したり、その頃の司令官が経験と訓練に基づいて各部隊の方針と手順を個別化したそうなんです。そこにナンバリングシステムも同様に当てはまったようで、その結果、ルールがバラバラになってしまったみたいなんです。50年以上かけてようやく統一システムになるあたり組織変更の難しさが伺えますね。

参考文献 OFFICE OF THE COMMAND HISTORIAN 「THE A TEAM NUMBERING SYSTEM」、Connecting Vets 「US Special Forces conduct bold, new experiment to meet future challenges」



PAC-3MSE 機動展開訓練

弾道ミサイルによる空からの脅威に晒されている日本。
2022年10月4日午前7時22分頃、北朝鮮は1発の弾道ミサイルを発射した。
最高高度約1,000kmで、およそ4,600km飛翔し、
7時44分頃日本の東約3,200kmの日本のEEZ(排他的経済水域)外に落下した。
その途中青森県上空を通過。
久しぶりの日本列島越えのコースとなった。
こうした弾道ミサイルに対抗するひとつの方法が、
航空自衛隊が配備する対空ミサイルPAC-3だ。
今回はその最新バージョンであるPAC-3MSEによる機動展開訓練を追った。



2022年9月7日、航空自衛隊第3高射群(本部:千歳基地)による「PAC-3機動展開訓練」が行なわれた。PAC-3とは、弾道ミサイルの迎撃が可能な空自の高射部隊へと配備されている対空ミサイルのこと。宇宙空間を飛翔し、大気圏に再突入後、地表に落下する「ターミナル・フェイズ」にて迎撃できるのは空自が配備するPAC-3しかない。それゆえに「最後の砦」とも言われている。北朝鮮や中国から日本に向けて弾道ミサイルが発射された際、日本本土に落下するまでの時間は20分もないと言われている。場所によっては10分未満というシビアな世界だ。この限られた時間の中で、PAC-3発射機をはじめとした装備資機材一式を防護範囲(射程)内へと機動展開させなければならない。基地や分屯基

地を出発し、展開場所まで一般道を走行していく。有事の際に迅速な行動をとるためには、ひたすら「移動」「展開」を繰り返して演練するしかない。そこで、長沼分屯基地に所在する第3高射群第11高射隊が、札幌駐屯地に隣接する南訓練場まで展開した。もちろん、全国の高射群でも機動展開訓練は行なわれている。今年度の「PAC-3機動展開訓練」は今回を含めて3回目となる。ちなみに1回目は大阪舞洲(5月19日)へと第4高射群第14高射隊(白山分屯基地)が、2回目は、海自呉基地(7月20日)へと第2高射群第6高射隊(芦屋基地)がそれぞれ展開した。第11高射隊にはMSE(Missile Segment Enhancement)と呼ばれるPAC-3の最新バージョンが配備されている。従来型となるCRI(Cost

Reduction Initiative)とMSEの違いは、防護範囲の広さだ。より高く、より遠くへと飛ばすことができるようになったので、防護範囲は約2倍に拡大した(※具体的な数値は非公開)。弾道ミサイルだけでなく、敵の戦闘機や攻撃機等が放ったミサイルなど、空から飛んでくる脅威全般に対処可能だが、高性能である分、MSEはかなり高額なミサイルとなっている。札幌駐屯地南訓練場に次々とPAC-3の車列が進入してきた。主となるのが、Launching Stationを略してLSと呼ぶ発射機だ。そしてここからミサイルを発射するためには、レーダー装置(Radar Set:RS)や射撃管制装置(Engagement Control Station,:ECS)、アンテナ・マスト・グループ(Antenna Mast Group:AMG)、電源車(Electric Power

札幌駐屯地と一般道を隔てて隣接する南訓練場に展開した第3高射群第11高射隊のPAC-3MSE。発射機に搭載された細かい方(写真右側)のキャニスターが新型のMSEとなる。